市民後見人に密着取材！

その一瞬の笑顔を大切にしたい

暮らしに寄り添う市民後見人

泉佐野市で市民後見人として活動する麻生川行信（あそがわゆきのぶ）さん。認知症のある女性Sさんのもとへ週1回訪問し、他愛ないおしゃべりをしたり、職員から普段のようすを聞きながら、お金の管理や暮らしのサポートをしています。

市民後見人は、家庭裁判所から選ばれた成年後見人（0）のひとつで、麻生川さんも、Sさんの思いや暮らしに寄り添い、同じ地域に住む市民目線での活動を大切にしています。

Sさんが人生で大切にしてきた〝歌〟

「自分のためにもこの活動を楽しんでいる」と話す麻生川さん。施設訪問の際、「Sさん、元気にしてたかな」と声をかけると、「元気です」とニッコリ笑顔を返します。ロビーのテレビから演歌が流れると、ふいに歌いはじめたSさん。麻生川さんもそっと手を添え、一緒に笑顔で歌います。Sさんは歌が大好き。美空ひばりさんの大ファンで、市立図書館でCDを借りては2人で歌うことも楽しみのひとつです。

そんなことから、施設管理者の西川さんによると「Sさんはいつも麻生川さんの訪問を楽しみにしている」とのこと。「この制度が必要な人はたくさんいるので、もっと市民後見人活動が広がってほしい」と話します。

Sさんの目を見て、手を握って優しく話かける麻生川さん。2人の会話や笑顔でまわりの人も笑顔に。

「物語のない会話でも、一瞬一瞬の笑顔を大切にしたい」と話す麻生川行信さん

それぞれの出会いに感謝

施設入所時から、親族とは疎遠になっていたSさん。これからの生活をどう支えていくか…。西川さんは、成年後見制度の利用を模索していました。そんな時、市民後見人養成講座の存在を市広報で知ることに。西川さんも同講座を受講し、その後は市民後見人の役割を職員にも伝えてくれています。

職員が「行（ゆき）ちゃんがくるよ」と声をかけると、嫌がっていた口紅も快く塗ってくれるというSさん。インタビューでは「行ちゃんは優しいです」とはにかみ、その笑顔がとても素敵でした。

Sさんと麻生川さんの大切なもの

0 成年後見人は、判断能力が十分でない方の生活の収支計画を立てたり、サービスなどの手配や環境を調整する役割などを担っている。

【業務の例】

- 預貯金の管理や支払の手続き
- ご本人の見守り（定期的な訪問）
- 福祉サービスの利用や入院などの契約
- 官公庁への各種手続き
- ご本人の不利益になる契約の取消

※手術など医療行為に関する同意、介護や家事などの事実行為はできず、また身元保証人や連帯保証人、葬儀の喪主などにはなれません。

麻生川さんにインタビュー

「地域にできる恩返しはこれや」

私は企業人として長年働いてきましたが、退職後、ご近所の方の顔さえも分からないことに気づきました。

ふと、小学校の通学路で旗をもって子どもたちを見守る人を見たとき、「俺が知らないところで、自分の子どもを見守ってくれてた人がいたんやな」とハッとさせられました。

もうひとつ、母親が、地域の皆さんにお世話になっていたことがあってね。そんな時、市の広報で市民後見人養成講座を見て、「地域にできる恩返しはこれや」とピンときたのです。

心の扉を探し続けて

ご本人の笑顔を見ることが一番のやりがいやね。とりとめもない話で、僕らの会話には物語がないんですけど、その一瞬に素敵な笑顔がでるんですよ。「この人の心が開く扉はどこにあるんやろう」って考えながら話しています。

今日も川遊びの話をしてたでしょ。「泳げるの?」って聞くと「泳げない。カナヅチ」って言うてましたね。「じゃあ潜水艦なんやなぁ」ってゆうたら、あの笑顔ですよ。

会話から昔の良き思い出や記憶を引き出すお手伝いができるのも市民後見人の役目かなと思っています。

外の空気を感じてほしい

普段から活動をサポートしてくれている泉佐野市社協の髙橋さん・池澤さんから「おたがいさまの会」という有償ボランティアを紹介いただき、月1回程度、外出を楽しんでもらっています。介護タクシーを手配し、公園に出かけて好きなお花をたくさん見てもらいたい。笑顔を見るのが一番うれしいですね。

麻生川さんの活動をサポートする社協の池澤さん（左）、髙橋さん（右）

Sさんから教えてもらった今を楽しむことの尊さ

どちらかというと言葉数少ない人やけど、その分、表情で話してくれます。ご本人が一番楽しかった時代。そのころのそのままで私に接してくれていると思うんです。忘れてしまってもいい。でも、今日、そこには喜んだ時間が確かにあったんですよね。その時、蘇った記憶。その一瞬一瞬を大切にしたいですね。

「今を楽しもう」と気付かせてくれたのは、Sさんとの出会いなんです。

No. 2

ふくしを巡る 歴史探訪

〝大正期の生活苦、方面委員立つ〟

「あなたは本当にそれでネズミをとるおつもりですか」101年前に書かれた、ある方面委員（のちの民生委員）の手帳の一文だ。米騒動のあおりで食糧がなく、殺鼠剤で自殺を図ろうとする妊婦とのリアルなやりとりから、市民の暮らしの厳しい現実が鮮明に浮かびあがってくる。

誰もが幸せにフクロウ（不苦労）でありますように。今回は隣人愛の精神をもって社会福祉の増進を担う民生委員・児童委員（以下、民生委員）のルーツを紹介するよ！

大正7（1918）年の秋の夕暮れ時。淀屋橋の理髪店モーラ館で大阪府の林市蔵知事は、鏡越しに写る一人の女性に目を止めた。幼子を背負って新聞を売り歩く女性から1部買った後、その足で近くの交番に立ち寄り、この女性の家庭状況の調査を依頼した。報告書は、病床に伏した夫にかわり、新聞を売って母親が生計を立てていたが、3人の子どもと夫との生活は苦しく、学用品も買えない子どもは学校へ通うことができないというものだった。自らも貧しい幼少時代を熊本で過ごした知事は、自身と重ね合わせ、他にもこのような人々がたくさんいると考えたんだ。

林知事は、社会事業に精通していた小河滋次郎博士の協力を得て、方面委員制度を創設。方面とは地域のことで、委員は一定の区域を担当し、訪問調査を通じて世帯状況を常に把握し、生活困窮等で支援が必要な人は迅速に関係機関につなぐという役割を担ったという。これが今の民生委員制度の始まりと言われているよ。

100年を超える長い歴史の中で、社会情勢や人々の生活のニーズに応じた活動を続けてきた民生委員は、あなたの暮らす街で今日も奔走しているぞ。

大阪社会福祉指導センターには新聞売り親子の調査報告書、民生委員が使用していた手帳、扇など貴重な資料が展示されているよ。小河博士を記念した碑もあり、往時を偲ぶことができるんだ！

民生委員制度創設70周年を記念して作られた扇。俳句、短歌を好んだ林市蔵氏の雅号は一象。象をモチーフにした印を使うなんて洒落てるね！

大阪メトロ谷町六丁目駅から徒歩5分
資料展示は平日9時～17時

 この広報紙の作成には共同募金配分金を活用させていただいています